

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25244001

研究課題名(和文) 尊厳概念のアクチュアリティ 多元主義的社会に適切な概念構築に向けて

研究課題名(英文) On the Actuality of the Concept of Dignity

研究代表者

加藤 泰史 (Kato, Yasushi)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：90183780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 38,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトでこの研究グループは、内外の研究者、特に欧米の研究者と国際ワークショップなどの学術交流を通して、「尊厳」概念が関わる様々な社会問題やそれらをめぐる学問的議論を検討して、「尊厳」概念の生命中心主義的理解が重要な論点になることを示した。この研究グループはこれらの研究成果を、個別論文など以外に、『思想』第1114号(岩波書店、2017年)、『尊厳概念のダイナミズム』(法政大学出版局、2017年)、『ドイツ応用倫理学研究』第4号~第7号(2014年~2017年)として公刊するとともに、一橋大学政策フォーラムを開催して一般市民に対しても研究成果の内容を分かりやすく発信した。

研究成果の概要(英文)：The project examined various social problems related to the concept of “dignity” as well as scientific and academic discussions concerned with these issues. It was conducted by a research group consisting of members in Japan and abroad through the organization of several international workshops and continuous scholarly exchange with outside researchers, from Europe and North America in particular. The project has shown that it is the bio-centric framing of the “dignity” concept which demands further elaboration and will constitute a major focus of future reflections. Apart from individually published research papers and articles, the findings of this project have been published in the No. 1114 issue of Shiso; (Iwanami 2017), the edited volume Songen gainen no dainamizumu (in Japanese; “Dynamisms of the Dignity Concept”) (Hosei University Press 2017), and volumes 4-7 (2014-2017) of “German Applied Ethics Yearbook”; contributions in English, German, and Japanese).

研究分野：哲学・応用倫理学

キーワード：尊厳 生命の尊厳 自律 価値論 障害者に固有の尊厳

1. 研究開始当初の背景

スイス憲法に1999年に「被造物の尊厳 (Würde der Kreatur/Dignity of Living Beings)」が導入されて以来、欧米では「尊厳」理解に概念的混乱が生じ、理論的な再検討や概念史の見直しを開始されたが、まだ十分に説得的な論拠が示されないという学問状況にあった。それは、この新しい概念が従来の「人間の尊厳 (Menschenwürde/Human Dignity)」の解釈枠には収まりきらないからである。しかしこの「人間の尊厳」に関して、特にEU憲法においてそれが最高規範の一つに位置づけられたことによってむしろ、独英の判決の分析からドイツ語の「Würde」と英語の「Dignity」の意味内容が異なることが明らかになった。「Würde」と「Dignity」は単なる辞書的な訳語関係にあるわけではなかったのである。前者は客観的で絶対的な価値を表し、後者は主観的で相対的な価値を言い表しており、現代英米法哲学で例えばウォルドロンが議論しているような、「身分 (Rank)」としての「尊厳」という尊厳理解に通底している。

他方で日本をはじめとした非欧米圏では「尊厳」の概念史さえ構築されていない学問状況であった。しかし、ES細胞研究やiPS細胞研究などの先端医療技術に関連した領域では「ヒト胚」などをめぐって「尊厳」の問題が継続的に議論されたり、「尊厳死」の法制化をめぐる動きに関わって「尊厳」を保って死にゆくことの内実が問われ続けたりしている。さらに「国連グローバルコンパクト」や「障害者権利条約」が国連の総会で採択されたりして「尊厳」概念の重要性は国際的に高まっており、様々な場面で「尊厳」がアクチュアルになりつつあったので、「尊厳」理解の具体的な内実を如何に分節化して充実させるかが学術的にも社会的にも求められていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、生命倫理学・生命医療倫理学・環境倫理学・グローバルエシックス・ケア倫理学・ビジネスエシックスなどといったドイツ応用倫理学各分野に関する「人間の尊厳」プロジェクトにおいて明らかにされた「尊厳」概念に関する研究成果を理論的に深化させ、特に(1)欧米で始まった「尊厳」概念の概念史を含めた見直しをさらに推し進め(具体的にはまず「人間の尊厳」からさらに「動物の尊厳」へと「尊厳」概念を拡張できる基盤を考察する)(2)スイス憲法に「被造物の尊厳」概念が導入されたことで現実となった「尊厳」概念の「生命中心主義的」拡張を射程に入れた「尊厳」概念のより包括的な基盤を解明した上で、(3)超高齢社会のダウンサイジングに際して基準となりうる「高齢者の尊厳」概念を確立するとと

もに、iPS細胞を含めた幹細胞研究の倫理問題に関して一定の方向性を示すことで、先端医療技術等の適切な推進を可能にする社会制度の基本諸問題を全体的・有機的に連関づける中で解明し、民主主義的・多元主義的社会に相応しい「尊厳」概念の具体的な規範内容を提示することである。

海外の研究協力者を含めた具体的な共同作業としては、現代の「尊厳」理解に大きな影響を与えたカントの「尊厳」概念に焦点を当て、シェーンリッヒ(ドイツ・ドレスデン工科大学教授)の価値論的アプローチを採用しながら、これまでの諸解釈を検討した上で、それを人間以外にも拡張できないかどうかを考察する。さらにまた、拡張された「尊厳」理解にもとづいて欧米の「尊厳」概念史の読み替えを遂行する。特に概念史の起点となるキケロの議論に関して読み替え可能かどうかを重点的に検討する。

この作業と並行して、「被造物の尊厳」に関する「人間中心主義的」解釈と「生命中心主義的」解釈とを比較検討しながら、後者の「生命中心主義」の議論を、日本が発信して世界的に注目されている「生命の尊厳」(「少子化社会対策基本法」)概念の理解に関連づけることができるかどうかを解明すると同時に、それにもとづいて「動物の尊厳」からさらに「植物の尊厳」まで「尊厳」概念を理論的に拡張できる基盤を析出することを目指す。

この研究プロジェクトに先行する「人間の尊厳」プロジェクトでは取り上げることができなかった「障害者倫理学 (Disability Ethics)」などの応用倫理学の新しい領域で、「尊厳」がどのように議論されているのかを検討する。

3. 研究の方法

研究打ち合わせや国際ワークショップ/国内ワークショップを年度ごとに開催しながら、議論の蓄積を図る。国際ワークショップに関しては、「人間の尊厳」プロジェクト以来共同で研究を遂行してきた海外の研究者を中心にして、さらにその都度設定された研究テーマに関して重要な業績を持つ研究者を新たに加えるとともに、研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者を含めて国内の研究者も加えて海外の研究者たちと密度の高い議論を積み重ねる。国際ワークショップは日本国内で開催するばかりでなく、海外(ドイツ・デュッセルドルフ大学とアメリカ・イエール大学を予定していたが、後者に関してはイエール大学側の事情で取り止めになった)でも開催してできるだけ多くの海外研究者の参加も獲得できるように工夫する。

国内ワークショップでは、研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者を中心に研究成果を検討するとともに、そこで設定し

たテーマに関して重要な知見を持つ研究者も新たに加えて議論を積み重ねる。国際ワークショップと国内ワークショップの研究成
果は『ドイツ応用倫理学研究』にその都度掲載して、それを関係する研究者に配布して学
術的な批判を仰ぎ、議論内容の質の向上に努める。また、それらから厳選して論文集や雑
誌の特集号などを編集して刊行するといった研究方法も同時に取るとともに、それらに
関して合評会などを開催してそれぞれの研究成果をより深く理論的に共有するとともに、
批判を通して自らの議論の問題点を把握する機会も設けた。

以上に加えてさらに、「尊厳」に関連する海外の文献を翻訳して『ドイツ応用倫理学研究』
に掲載したり、あるいは場合によっては出版社から刊行したりすることで、海外の重要
な議論を理論的に共有することも重視した。

4. 研究成果

方法論的には価値論的アプローチを重視し、特にシェーンリッヒが展開した「a fitting
attitude theory of value」の理論を採用して「尊厳」概念の分析を進めた。これによっ
て以下の点が明らかとなった。

(1) カントの「自律 (Autonomie)」概念を「自己愛 (Selbstliebe)」と解釈し直すこと
によって、「尊厳」概念を「動物の尊厳」にまで射程を広げることができた。それはとり
わけキケロの議論を再解釈することを可能にすることを通じて達成できた。しかしなが
ら、「被造物の尊厳」が想定している「植物の尊厳」までは基礎づけることが困難であ
ることも同時に明らかとなり、ここに「人間中心主義的」解釈の限界が見定められた。

(2) 他方で、「生命中心主義的」解釈には様々な理論的難点も指摘でき、十全な解釈に
たどり着くことはできなかった。とりわけこの解釈に対するビルンバッハの批判(ビル
ンバッハ「生命の尊厳」とは、どういう意味か」『思想』第 1114 号)は重要な意味を
持ち、それゆえにこれを理論的に克服することが「被造物の尊厳」の「生命中心主義的」
解釈(そしてさらに、「生命の尊厳」)の可能性を考察するための継続課題となった。その
ために再度「被造物の尊厳」に関する「生命中心主義的」解釈を主張する研究者とこの問
題について討議する機会を設定して議論を深める必要がある。

(3) さらにまた、日本の高齢社会介護の現場で析出できた「らしさ
(likeness/Wieheit)」という尊厳理解が存在することが明らかになった。つまり、この
理解によれば、「人間の尊厳」は「人間らしさ」ということであり、あるいはまた「尊厳
死」は「私らしく死ぬこと」あるいは「人間らしく死ぬこと」にほかならない。こうした

「尊厳」理解は欧米では指摘されていないので、少なくとも日本固有の理解として注目に
値する(これは「尊厳」研究が不在ないし不足している非欧米の「尊厳」理解の一つとし
て重要な意味を持ちうる)。ただし、この理解に関しては規範性が希薄となる点に難点
が指摘できるであろう。とはいえ、規範性の強い欧米的な「尊厳」理解と、こうした日本
の「尊厳」理解との両方に通底する「尊厳」理解を提示することが重要となる。

(4) 「障害者倫理学」に関しては日本ではほとんど議論されてこなかった。しかし、「相
模原殺傷事件」などを分析すると、その重要性を認識せざるを得ない。この研究プロ
ジェクトでは、アメリカのキース・ヘザードを招聘して「障害者倫理学」の問題構制を
検討した。そこでは「健常者/障害者」という二分法的な解釈図式そのものが問題であ
ること、そうした図式が障害者に対する偏見を増幅させ、障害者を社会から隔離しよう
とする政策を事実上推進してしまっていることなどが明らかとなった。日本ではこの分
野はまだほとんど議論されていないので、その確立に向けて継続して検討してゆく予
定である。このことと関連して、WHO の「健康」概念に対する批判も検討した。この
概念の脱構築も不可欠である。

(5) 以上の研究成果から、「尊厳ある社会」をどのように構築できるのかという課題
に対していくつかの重要な手がかりを得ることができた。特に重要なのは、「尊厳の毀
損」を通して問題を発見してゆくという「ネガティブアプローチ」が有効であること
が明らかになった。そこに民主主義的で多元主義的な社会にふさわしい「尊厳」概念
を可能にするという展望が見出されうる。

(6) これらの研究成果は、『ドイツ応用倫理学研究』第 4 号から第 7 号までと、『思想』
2017 年 2 月号(岩波書店)の特集号および論文集『尊厳概念のダイナミズム』(法政
大学出版局)として編集して刊行した。特に後者は『図書新聞』の書評において「従
来ある多くのテキストが提供するのとは異なる視角から道徳問題を検討するのに役
立つ貴重な文献」と高く評価された。

(7) さらに国際ワークショップでの研究発表をもとにしてドイツの出版社(de Gruyter,
Berlin/Boston)から論文集を刊行する予定であり、現在編集作業中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 55 件)

加藤泰史、「尊厳概念史の再構築に向けて：現代の論争からカントの尊厳概念を読み直す」、『思想』(査読無)(依頼論文)、岩波書店、第 1114 号、8-33、2017。

Keiko Matsui Gibson(松井佳子)、

“Re-examining Human Dignity in

Literary Texts: In Seeking for a continuous Dialogue Between the Conceptual and the Empirical Approaches”, in: Dialog: Volume 56, Number 1(査読無), Wiley Periodicals, 53-80, 2017.

松田純、「新しい健康概念とロボット工学」、『神経内科』(査読無)、86(5)、81-86、2017。

宇佐美公生、「『尊厳』概念をめぐる自然主義および形而上学的観点からの考察」、『ドイツ応用倫理学研究』(査読無)、第7号、241-247、2017。

田中伸司、「哲学における対話の意味」、『文化と哲学』(査読無)第34号、35-51、2017。

別所良美、「近代日本形成期における進化論の意義」、『哲学と現代』(査読無)第30号、150-161、2015。

松田純、「神経難病における健康概念と現代医療倫理学」、『総合診療』(査読無)、25(3)、258-260、2015。

品川哲彦、「尊厳死という概念のあいまいさ」、『理想』(査読無)、理想社、692号、111-122、2014。

松田純、「遺伝治療と社会」、『シリーズ生命倫理学』(査読無)、11、1-24、2013。

[学会発表](計59件)

Yasushi Kato(加藤泰史), “The Heuristic Use of Dignity in Kant’s Philosophy”, in: The 22. Hitotsubashi International Conference on Philosophy/Social Philosophy/Applied Ethics (国際学会), Hitotsubashi University, 2017.

宇佐美公生、「『尊厳』概念をめぐる考察の観点について 生成論と形而上学的観点を中心に」, 第19回一橋哲学フォーラム、一橋大学、2016。

Yasushi Kato(加藤泰史), 「Philosophy as a Critical Facilitator」, 日本哲学会第75回大会、京都大学、2016。

松田純、「尊厳死と安楽死」, 一橋大学政策フォーラム、一橋大学、2016。

Keiko Matsui Gibson(松井佳子), “Reconceptualizing Human Dignity from Pragmatist Perspectives: Lived Experiences of Uncertainty and Normativity in Literary Texts”, in: international Conference “Issues of Recognition in Pragmatism and American Transcendentalism” (招待講演)(国際学会), University of Helsinki (Helsinki/Finland), 2015。

齋藤純一、「熟議民主主義と立法システム改革」, 日本学術会議、学術フォーラム「立法システム改革と立法学の再編」, 2015。

松田純、「尊厳死法案の検討 新しい健康概念に照らして」, 一橋哲学フォーラム、一橋大学、2015。

松田純、「認知症の人のケアのむずかしさ 認知症の人の自律を尊重するとは?」, MSG 研修会、富士市交流センター(静岡県富士市)、2015。

松井佳子、「グローバル社会におけるアメリカ哲学:環境・技術・教育・文学・美学・ジェンダー・政治」, 京都大学、アメリカ哲学フォーラム、2013。

[図書](計22件)

齋藤純一、『不平等を考える 政治理論入門』, 筑摩書房、全284頁、2017。

加藤泰史、ゲアハルト・シェーンリッヒ、ミヒャエル・クヴァンテ、ディーター・シュトゥルマ、宇佐美公生、品川哲彦、岩佐宣明、小林道太郎他、『尊厳概念のダイナミズム: 哲学・応用倫理学論集』, 法政大学出版局、全436頁(1-20, 65-97, 119-136, 137-156)、2017。

加藤泰史、大河内泰樹他、『承認』, 法政大学出版局、全451頁(39-63, 96-130)、2016。

松田純、森下直貴他、『生命と科学技術の倫理学 デジタル時代の身体・脳・心・社会』, 丸善出版、全262頁(57-71)、2016。

齋藤純一、姜尚中他、『逆光の政治哲学—不正義から問い返す』, 法律文化社、全236頁(1-18)、2016。

加藤泰史、蔵田伸雄他、『カントと現代哲学』, 晃洋書房、全187頁(1-17, 159-164)、2015。

品川哲彦、『倫理学の話』, ナカニシヤ出版、全276頁、2015。

加藤泰史、越智博美他、『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」』, 彩流社、全317頁(61-65)、2015。

齋藤純一、川崎修他、『岩波講座政治哲学5 理性の両義性』, 岩波書店、全240頁(173-198)、2014。

[その他]

加藤泰史研究室ホームページ

http://www.soc.hit-u.ac.jp/~kato_yasushi/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 泰史 (Yasushi Kato)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号: 90183780

(2) 研究分担者

宇佐美 公生 (Kosei Usami)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号: 30183750

齋藤 純一 (Junichi Saito)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：60205648

松井 佳子 (Keiko Matsui Gibson)
神田外語大学・外国語学部・教授
研究者番号：60255180

大河内 泰樹 (Taiju Okochi)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：80513374

品川 哲彦 (Tetsuhiko Shinagawa)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：90226134

(3) 連携研究者

松田 純 (Jun Matsuda)
静岡大学・人文社会科学部・特任教授
研究者番号：30125679

田中 伸司 (Shinji Tanaka)
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：50207099

別所 良美 (Yoshimi Bessho)
名古屋市立大学・人文社会系研究科
・教授
研究者番号：10219149

(4) 研究協力者

Gerhard Schönrich, Professor Dr.
Technische Universität Dresden

Dieter Sturma, Professor Dr.
Universität Bonn

Michael Quante, Professor Dr.
Universität Münster

Dieter Birnbacher, Professor Dr.
Universität Düsseldorf

岩佐 宣明 (Nobuaki Iwasa)
愛知学院大学・教養部・准教授

小林 道太郎 (Michitaro Kobayashi)
大阪医科大学・看護学部・准教授

高畑 祐人 (Yuto Takahata)
名古屋大学・非常勤講師

中澤 武 (Takeshi Nakazawa)
明海大学・非常勤講師